《研究ノート》

「生苦」をめぐって

畝部俊英

生苦トイフハムマルヽトキノ苦ナリ。十月ノアヒタ三百余日胎内ニ処シテ五位ヲヘヽ血肉ニマシハリテ諸苦ヲウク。月ミチ期イタリテノチ、ハシメテムマルヽトキ、頭ヲサカサマニシ、身ヲツヽメテイツ、一切ノ骨節ツヽマリテノフルコトアタハス、ソノ苦痛ニヨリテ前生ノ事コト〳〵クワスル。

――存覚『顕名鈔』――

はじめに

釈尊は鹿野苑の初転法輪において、次のように語っている。

「比丘たちよ、苦しみに関する聖なる真理（苦聖諦）とは、次のようである。生まれることも苦しみであり、老いることも苦しみであり、病むことも苦しみであり、死ぬことも苦しみであり、憎い者たちと会うことも苦しみであり、愛する者たちと別れることも苦しみであり、求めても手に入らないことも苦しみであり、要するに執着を起こすもとである身心・環境のすべては苦しみである。(1)」

これは、四聖諦の第一、苦聖諦の内容を説明しているもので、生、老、病、死の四苦に怨憎会、愛別離、求不得、五盛蘊を加えて八苦としてまとめられ、いわゆる「四苦八苦」と呼ばれているものである。

ところで、これらの「四苦八苦」のうち、「生苦」について、『望月仏教大辞典』では、「梵語 jāti-duḥkha の訳。巴梨語 jāti-dukkha. 西蔵語 skye-bahi sdug-bsnal. 生時の苦の意。四苦の一。八苦の一。即ち衆生の生時に於て受くる所の苦を云ふ。」として『中阿含』第七・『分別聖諦経』、『大毘婆沙論』第七十八の文を引いて、「是れ衆生の生時に於て受くる所の苦悩を生苦と名づけたるなり。」と述べ、更に「瑜伽師

地論第六十一には生苦に五種の相あるを説き」と言って、その文を引き、次に「又五王経には胎内所受の苦を説き」と、『仏説五王経』の以下のような文を紹介している。

「何をか生苦と謂ふ、（中略）〔胎児は―筆者注―〕母腹中の生蔵の下、熟蔵の上に在り。母一杯の熱食を啜ひて其の身体に灌がば鑊湯に入るが如く、母一杯の冷水を飲まば亦寒氷の体を切るが如し。母飽く時は、身体を迫迮して痛み言ふべからず、母饑ゆる時は腹中了了として亦倒懸の如く、苦を受くること無量なり。其の満月に至りて生れんと欲する時、頭を産門に向くるに劇きこと両石狭山の如し。生れんと欲する時、母危み父怖れ、生れて草上に堕つるに、身体細軟なれば草其の身に触るゝや、刀剣を履むが如く、忽然として失声大呼す。此れは是れ苦なりや不や。諸人咸く言はく、此れは是れ大苦なり」

ここには、胎内苦、出胎苦、出胎後の苦によって「生苦」が示され、最後に『大般涅槃経』第十二の「生とは出相なり。所謂五種あり、一には初出、二には至終、三には増長、四には出胎、五には種種生なり。」という文をもって、「生」の概念を規定し、「是れ入胎より出生に至るを生苦となすの説なり。」[2]と結んでいる。

仏教辞典では、この『望月仏教大辞典』が、「生苦」について比較的詳しく述べているのであるが、他の辞典、例えば『仏教語大辞典』では、「四苦の一つ。託胎から出生までの苦しみ。」[3]と言っているだけであり、『仏教医学事典』において、「生・老・病・死と四苦の初めにあげられる、いわゆる生苦には二種あって、一は狭小な産道を通るばあいの苦痛であり、二は出産後にはじめて外物、つまり外気、助産婦の手、産湯、産着などに触れる苦痛である。こういう生苦をなめて生まれるため、人は過去における一切の記憶を忘却するといわれている。」[4]と、出胎苦、出胎後の苦、記憶の忘却を紹介しているのが、注意されるところである。

いずれにしても、われわれにとって、この「生苦」は日常の意識の中には受け入れていない事柄であるだけに、具体的にどういうことかが、もう一つはっきりしないのである。

「生苦」の「生」が jāti であることは、最初に紹介したような、苦聖諦を「四苦八苦」で説明しているパーリ語やサンスクリット語の諸文献によって確められ、それを漢訳（中国訳のこと）では、安世高の訳とされている『転法輪経』では「生・老苦」[5]と訳されていて、「生」の字をもってあらわすということは、安世高以後の漢訳経典において定着している。

パーリ語やサンスクリット語の jāti は、√jan（生む、生まれる）を語根とする語であり、「存在」という意味もあるが、「生まれてくること」が中心的な意味であるから、jāti-duḥkha（パーリ語では jāti-dukkha）は、仏教辞典にあるように「生時に於て受くる所の苦」であるのであるが、漢字の「生」はどうであろうか。

例えば、諸橋『大漢和辞典』巻七の「生」の項を見てみると、「うむ」、「うまれる」に次いで「いきる」とあり、その「いきる」について

「㈠存活する。生きてゐる。〔左氏、僖、三十三〕狄人帰二其元一、面如レ生。㈡いきながらへる。〔中庸〕生二乎今之世一、反二古之道一。㈢生きながら。〔左氏、昭、二十九〕故龍不二生得一。」とある。われわれが現在も用いているように、漢字の「生」には「いきる」の意があるのである。

「生まれてくる苦しみ」が具体的、経験的にどういうことか分らなくなった今日では、この「生苦」という仏教語は、『広辞苑』が、

「〔仏〕四苦の一。生存の苦。」

と解釈しているように、漢字の「生」の「いきる」の意に引き寄せて、「生存の苦、生きている苦しみ」というような理解も一部では行われている現状である。

これは「生苦」が、どんな意味を持つのか分らなくなったことと同時に、仏教を常識の範囲内で合理的に解釈しよう、あるいは常識に合わない考えはできる限り排除しようという、現代人の考え方の一つのあらわれとも見られる。

ところで、日常の意識や常識では把握できない「生時に於て受くる所の苦」である「生苦」について、仏教文献だけでなく、広くインド古典のなかに尋ね、その概念を明確にしたのは、原実博士である。

原博士は「生苦」[8]および"*A Note on the Buddha's Birth Story*"[9]という二篇の論文によって「生苦」を論じ、更に最近の刊行（昭和六十一年四月）になる『仏教の思想―三枝充悳対談集』（以下『対談集』という）に収められている「インド思想と仏教」[10]というテーマでの対談でも、「生苦」について言及している。

先に発表されている「生苦」という論文よりも、近刊の『対談集』によって、筆者が「生苦」について強く関心を呼びさまされたのは、この『対談集』を読むに先立って、河合隼雄博士の「意識について」[11]（『世界』昭和六十年十一月号所収）という論文に眼を通していたからである。

その論文において、河合博士はLSDという幻覚剤や「ホロトロピック・セラピー」という集団療法によって得た非日常的な意識変化の過程にあっては「周産期（ペリナタル）のレベル」が見出され、それは出産時の死ぬほどの苦しみを幻覚状況のなかで再体験するものであるという、スタニスラフ・グロフ博士の実験結果[12]を紹介している。

後に詳しく取り上げるが、右のような「周産期のレベル」での、出産時の苦しみの再体験は、「生苦」と大変よく似ている。似ているという以上に、今まで日常の意識では了解することの困難であった「生苦」がリアリティーをもって考えることができるようになった。そこに、筆者が「生苦」について強く関心を呼びさまされた理由があるのである。

そこで本稿では、「生苦」について、先ず原博士の「生苦」という論文に焦点を当てて、仏教とヒンズー教文献における「生苦」の概念を確認し、次に河合博士の紹介するグロフ博士の「周産期のレベル」の問題を「生苦」と対比し、更に「生苦」をめぐる諸問題について論じてみたい。

註

(1) Vinaya (PTS. 版), *Mahāvagga*, I, 6, 19, vol. I, p. 10. 拙訳「成道から伝道へ（律蔵・大品一～二四）」（原始仏典　一　『ブッダの生涯』所収、講談社、昭和六十年四月、七一―七二頁）。

(2) 望月信亨『望月仏教大辞典』第三巻、二五七三頁。

(3) 中村元『仏教語大辞典』（昭和五十年二月、第一版）上巻、七〇六頁。

(4) 福永勝美『仏教医学事典　補・ヨーガ』（昭和五十五年十二月、雄山閣出版）二二一頁。

(5) 『大正蔵』二巻、五〇三頁、中段。

(6) 諸橋轍次『大漢和辞典』巻七、一〇二七頁、下段―一〇二八頁、上段。

(7) 新村出『広辞苑』（昭和四十四年五月、第二版第一刷、岩波書店）一〇八七頁。

(8) 原実「生苦」（玉城康四郎博士還暦記念論文集『仏の研究』所収、六六七―六八三頁、昭和五十二年十一月、春秋社）。

(9) Minoru Hara, *"A Note on the Buddha's Birth Story"*, Indianisme et Bouddhisme, Publications de l'Institut Orientaliste de Louvain, No. 23, 1980. pp. 143―157.

(10) 三枝充悳・原実（対談）「インド思想と仏教」（『仏教の思想　三枝充悳対談集』所収、四―七頁、昭和六十一年四月、春秋社）。

(11) 河合隼雄「意識について」（『世界』一九八五年十一月号所収、二六三―二七六頁、『宗教と科学の接点』再録、昭和六十一年五月、岩波書店）。

(12) 昭和六十年四月二十三日より二十九日まで、国立京都国際会議場で開かれた第九回トランスパーソナル国際会議における、スタニスラフ・グロフ博士自身による「意識の研究と人類の生存」という題の発表に、この実験結果が述べられている。河合隼雄・吉福伸逸共編『宇宙意識への接近』（昭和六十一年三月、春秋社）にその和訳が収録されている。
なお、スタニスラフ・グロフ・クリスティナ・グロフ著、山折哲雄訳『魂の航海術』（「イメージの博物誌」10、一九八二年六月、平凡社）にも言及されている。

一

原博士は「生苦」という論文において、冠頭に『宝物集』の「生苦」の記述(1)を出し、次に漢訳仏典中より関連章句を蒐集し、その内容を紹介している。

それは『仏説五王経』(2)、『正法念処経』第七十巻(3)、玄奘訳『倶舎論』巻第九(4)、『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻第十一(5)、『大宝積経』巻第五十六・「仏説入胎蔵会」第十四之一(6)、安世高訳『道地経』(7)、竺法護訳『修行道地経』巻第一(8)などに見出されるものである。

そして、先ず『五王経』によって「生苦」について、

「即ち受胎後週日を経るに従って胎児は薄酪の状態より漸次形を整え、意識を具えるに到り、母の飲食物や飢餓飽食に影響されつつ無量の胎内苦を経験し、月満ちて誕生する時は頭を下にして狭隘な産道を通過し、生れ出ずるや繊細な身体は粗い褥の上にねかされて刀剣を屠む思いをするというのである。(9)」

と述べ、更にいくつかの文でこれを補い、次に『道地経』及び『修行道地経』によって、

「これら道地経類は心身具足した胎児が不浄狭隘な胎内で経験する苦、業風により逆立のまま産門に向下する苦、繊細な新生児が経験する出産時の手荒な処置等、何れも死ぬ程の苦しみを挙げている

が、この中でこの生苦による宿行の忘却、擬惑、迷惘、不識の概念は注目に値し、修行道地経の生れ落ちた際の外風との接触も次下に説く梵文諸典籍にみえる生苦との比較に於いて興味がある。[10]」

と、漢訳仏典に説かれる「生苦」の略述を結び、次に仏教外のヒンヅー教諸典籍における「生苦」文献の紹介に移る。

ヒンヅー教諸典籍として引かれているのは、*Pāśupata-sūtra* 5.40 に対する Kauṇḍinya の註 (*Pañcārthabhāṣya*)[11]、*Viṣṇu Purāṇa* 6.5[12]、*Brahma Purāṇa* 233[13]、*Agni Purāṇa* 369[14]、*Garbha Upaniṣad* III~IV[15]、*Mārkaṇḍeya Purāṇa* XI[16]、*Garuḍa Purāṇa*, *Uttara Khaṇḍa* 32.63-70[17]、*Padma Purāṇa* II. 7-8[18] などであるが、これらのうち、先づ Kauṇḍinya の「生苦」についての所説を、原博士が取り上げ、解説している個所を引用してみる。

「個我 (puruṣa 霊魂?) は母の胎内に恰も破損した車に身を置く人の如く、自由な空間もなく制約下に疲労を経験しつつ、出口なき暗黒の中に囚人の如く閉じこめられている (胎内苦)。次いで月満ちてこの世に生れ出る時、

『個我 (puruṣa) は糞の堆積に顔を沈め、尿の雨に潅がれつつ、出口の閉った (母の) 体内で産道 (yoni) 通過の隘路にいたく痛めつけられ、骨、急所、関節を押し潰されながら泣きわめきつつ生れてくる。その後又しても彼には凡そ不馴れな外の風 (bāhya vāyu)、誕生旋風 (jananāvarta) に触れられると激痛が起る。……そしてそれによって彼は前世に始まる (一切過去世の) 記憶の因たる潜在印象 (saṃskāra) を喪失する。斯く個我 (puruṣa) のみが生苦を経験するのである。』

ここに個我 (puruṣa) は身体及び感官 (kārya-karaṇa) と区別され、意識 (cetana) を有し業の享受者 (bhoktṛ) たるものとされる。次いで記述は「無知苦」(ajñāna-duḥkha) に進む。生れ出た新生児は既に自我意識 (ahaṃkāra) を具えているため、自分が何者であり、如何なる係累を有するものかも判らず、何を為すべきか、何を飲食すべきか、何が真であり何が偽りであるかも判らないでいる。この間に経験する苦が「無知苦」であると説かれる。

ここに「生苦」とは糞尿と共在する胎内から、肢節圧迫の苦を経験しつつ産道を通過し、外に出ては外気に触れる際の激痛を指し、産声はこの「生苦」の象徴とされる。既述の道地経類にみえた「忘宿行」「意識転倒」はここで「生苦」経験の結果たる前世の記憶喪失に符合している。[19]」

以上の引用によって、ヒンヅー教諸典籍における「生苦」(ヒンヅー教諸典籍では、「生苦」は janma-duḥkha であらわされる) のおよその概念が知られるのであるが、論文は更にくわしく、先ほど紹介した、他のヒンヅー教諸文献によって論じていく。それらの中で、もう一つ、*Garbha Upaniṣad* 第三—四章の個所を引かせてもらう。

「『さて九ケ月目に彼は一切の相 (lakṣaṇa) を知る器官を具える

に到り、前世を想起し、善悪業を分別する（三）。過去幾千の胎をみて（彼は思う）―私は各種の食物を食し、いろいろな乳房を吸った。生れては死に又生れた。私が周りの人のために為した善悪業、それによって今私は独り焼かれる（思いである）。彼らは（夫々の）果報を享受して（どこかへ）行ってしまった。噫、私は苦海に沈淪して対処する術を知らない。若し胎より出た暁には私は悪業を滅し、その結果解説を授け賜う大自在天（Maheśvara）……又那羅延天（Nārāyaṇa）に帰依しよう。……又数論（sāṃkhya）瑜伽（yoga）を修めよう。出胎の暁には永遠なる梵を思念しよう。――さて彼が陰門に到ると（産道通過時の）しめつけ（yantra――分娩用器具?）の故に大苦に悩まされ、一度び誕生するやヴィシュヌ風（vaiṣṇava vāyu）に触れられてその時（過去幾千の）生死を忘れ、善悪業を分別することがない。[20]』」

ここでは、以上の二つの文献を引用したのみであるが、原博士はヒンヅー教諸典籍を精査し、インド古典における「生苦」の概念を詳細に論じ、最後にこれらをまとめて、

「宝物集にみえる誕生時の肉体的苦痛を以って「生苦」となす概念規定は漢訳仏典に或る程度の類似を見出し、後者はインド仏教に連っているが、同類の思想はヒンヅー教諸典籍にも見出される。「胎内苦」は不浄の母胎中に閉じこめられ、自由意志なきまま母の飲食・挙動に影響される苦、「出胎苦」は誕生風に煽られて、倒懸の姿勢で狭隘な産道を肢節の圧迫を経験しつつ通過せねばならぬ苦、更に誕生の暁、外気に触れ、自由意志なきまま他人の手荒な処置に自己を委ねねばならぬ苦である。同時にこの「生苦」によって個我は前世の記憶を喪失し、折角の厭離輪廻・欣求解脱も自らの蒙昧化によって振り出しに戻される。細部の異同にも拘らず、これら諸点はヒンヅー教典籍の述べるところに共通している。[21]」

と述べている。

以上は、原博士の「生苦」という論文の抜粋引用による紹介であるが、筆者が、この論文を読んで気づいたことを次に述べておきたい。

先ほど引用した、*Pāśupata-sūtra* 5.40 に対する Kauṇḍinya の註では、苦（duḥkha）を三分類している。その第一は数論頌第一に説かれる依内苦（ādhyātmika）、依外苦（ādhibhautika）、依天苦（ādhidaivika）であり、第二は胎内苦（garbha-）、生苦（janma-）、無知苦（ajñāna-）、老苦（jarā-）、死苦（mṛtyu-）の五苦、第三は此の世の怖（ihaloka-bhaya）、来世の怖（paraloka-bhaya）、怨憎会苦（ahita-samprayoga）、愛別離苦（hita-viprayoga）、求不得苦（icchā-vyāghāta）の五苦である。

この註の分類によれば「胎内苦」と「生苦」は分けられているのであるが、この点について、仏教では「**生苦**」**生**とは「生きる」ではなく「生まれる」である。生まれるとは母胎から出産することではなく、母胎に妊娠する初刹那（結生）を指す[22]」のであり、その識については入胎

一刹那からの識(結生識)、在胎の識、出胎後の識を認めているのである[23]から、既出の『辞典』[24]にあるように「託胎から出生までの苦しみ」である。つまり、仏教の「生苦」は、「胎苦・生苦」という言い方も見出される[25]が、概して胎内苦、出胎苦、出胎後の苦の全体を一つに含めているのに対し、Kauṇḍinyaは、「胎内苦」と「生苦」とをはっきり分けているのであるから、「生苦」は出胎の前後の出胎苦のこととなるのであろう。

本稿においても、分けてあらわす方がはっきりする場合には、胎内苦、出胎苦、そして出胎後を切り離して、出胎後の苦という言い方を用いる。

ところで、出胎苦、あるいは出胎後の苦によって自分が何者であり、何のために生まれてきたかをすっかり忘れて、愚者(bāla)となってこの世に生まれると同時に、この世の生を無知から始めなくてはならないというのは、大変興味深い。

真宗的に言えば、宿世に「五戒をたもてる功力」[26]によって、せっかく人間に生まれたのに、何のために人間に生まれてきたかもすっかり忘れてしまうのである。しかも母胎の中にあるときは、胎内苦にせめられて、今度人間に生まれたら解脱をめざす道に努力しようと自から願ったにもかかわらず、産道通過の苦しみによってこのことさえも忘れはてて出胎する、或いは出胎後の激痛によって忘れてしまうという。

「生苦」は、人間の出胎後が無知から始まること、その無知から始まる人間にとって苦からの解脱の可能性があるのか、ないのか、その他さまざまな問題を提起する。

次に、河合博士の紹介する、グロフ博士の「周産期のレベル」の問題を「生苦」と対比してみよう。

註

(1) 吉田幸一・小泉弘共編『宝物集』九冊本(古典文庫二五八、昭和四十四年一月)九七頁。

(2) 『大正蔵』十四巻、七九六頁、上段。

(3) 『大正蔵』十七巻、四一二頁、下段。

(4) 『大正蔵』二十九巻、四七頁、下段—四八頁、上段。この梵文の対応個所は、(P. Pradhan, ed., *Abhidharmakośabhāṣya* (Patna, 1967), p. 130, *ll.* 6-18. そのチベット訳の和訳は、山口益・舟橋一哉『倶舎論の原典解明 世間品』(昭和三十年十一月、法蔵館)一四七—一四八頁参照。

(5) 『大正蔵』二十四巻二五六頁、上—中段。

(6) 『大正蔵』十一巻、三三〇頁、下—三三一頁、上段。

(7) 『大正蔵』十五巻、二三四頁、下段。

(8) 『大正蔵』十五巻、一八八頁、上段。
その他の「生苦」関説個所として、原博士は『瑜伽師地論』巻第二十八、(『大正蔵』三十巻、四三五頁、上段)。同、巻第六十一(『大正蔵』三十巻、六四二頁、上段)、『大乗阿毘達磨雑集論』巻第六(『大正蔵』三十一巻、七一九頁、下段)を注であげている。

(9) 原実「生苦」(玉城康四郎博士還暦記念論文集『仏の研究』所収)六六八頁。

(10) 同右、六七〇頁。

(11) R. A. Sastri, ed., *Pāśupata sūtra with Pañchārthabhāshya of Kauṇḍinya*, TSS 143 (Trivadrum, 1940), p. 141, *l.* 10—p. 143, *l.* 10.

(12) The Shri Venkateshwar Press (Bombay, 1910), pp. 276-277.
(13) Ānandāśrama Sanskrit Series 28 (Poona, 1895), pp. 561-562.
(14) Ānandāśrama Sanskrit Series 41 (Poona, 1900), pp. 593-594.
(15) W. L. Shāstri Paṇśikar, ed., *One Hundred and Eight Upanishads*, Nirnayasagara Press (Bombay, 1925), pp. 134-135. 中野義照訳『ガルバ・ウパニシャット』（『ウパニシャット全書』四、大正十一年十二月、世界文庫刊行会、九一―九六頁）。
(16) The Shri Venkateshwar Press (Bombay, 1910), pp. 15-16.
(17) The Shri Venkateshwar Press (Bombay, 1906), p. 199.
(18) Ānandāśrama Sanskrit Series, extra I, vol. I (Poona, 1893), pp. 128-131.
(19) 原実「生苦」六七一頁。
(20) 同右、六七三―六七四頁。
(21) 同右、六七五―六七六頁。
(22) 水野弘元『仏教要語の基礎知識』（一九七二年五月、春秋社）一八一頁。
(23) 同右、一七一頁参照。
(24) 中村元『仏教語大辞典』上巻、七〇六頁。
(25) 『大正蔵』十一巻、三三一頁、上段。
(26) 蓮如『御文』・第二帖・第七通（出雲路修校注『御ふみ』（東洋文庫、三四五、一九七八年一二月、平凡社）一五六頁。

二

先に一言したように、「生苦」について筆者が特に強く関心を呼びさまされたのは、精神病理学者のスタニスラフ・グロフ博士が過去三〇年以上にわたってチェコ及びアメリカにおいてLSDという幻覚剤や、幻覚剤を用いない「ホロトロピック・セラピー」という集団療法によって行ってきた実験の結果について、河合隼雄博士が「意識について」という論文[1]の中で紹介しているのを前もって読んでいたからである。

その実験の結果によると、個人の体験する意識変化の過程は、一般化すると三段階に要約でき、1個人の自伝的レベル、2周産期のレベル、3超個のレベルであるという。以下、河合博士の論文によって、この三段階を紹介してみる。

「個人の自伝的レベルでは、その個人がそれまで経験してきたことで、その人の人格内に統合されなかったり、未解決のままで抑圧されてしまっているようなことが現われる。これは精神分析など一般の心理療法の取り扱うレベルで、理解しやすいものである。

周産期（ペリナタール）のレベルでは、個人は誕生のプロセスを体験すると言っていいであろう。（中略）

このレベルで個人が体験するのは、出産前後の体験と極めてパラレルであり、たとえば洞窟に閉じこめられていて出口がなく困っているうちに、恐ろしい圧力を感じ死ぬほどの苦しみを味わう。そこでやっと出口が見つかり、細い穴を通って広い空間に出るような幻覚体験をもつのである。このレベルでは身体と自我とが一体となってきているので、異常な体感や実際の痛みなどを伴って感じられるときがあり、「死」の苦しみに耐え難いほどの体験をする人もある。

ここでグロフはこのような出産にまつわる体験が生物学的な誕生の再体験を超えて、心理的、霊的な体験であることを強調するが、

個人的に話し合っているときは、ある個人のLSDによる周産期体験は、現実にその人が出産のときに経験したことの再体験と思われるようなことが多いことも述べていた。たとえば難産だった人とか、産道の途中でつかえた人などの産婦人科医による記録と、LSD体験で語られることとが相当に一致するというのである。もしそうであれば、人間の記憶という点についても興味深い発見であると思うが、筆者としては今のところ確かめようのないことである。

次の超個のレベルは、ウィルバーが超個の帯域と記述しているところ、ユングの言う普遍的無意識の領域を指している。(以下略)[2]」

右の記述の中で注目されることは、第二段階の周産期のレベルである。LSDの幻覚体験のなかで自分の誕生のプロセスを再体験するのであるが、「「死」の苦しみに耐え難いほどの体験をする人もある」という。これはまさに「生苦」である。しかも、「洞窟に閉じこめられていて出口がなく困っているうちに、恐ろしい圧力を感じ死ぬほどの苦しみを味う」というのは、胎内苦とほとんど同じように思われ、「恐ろしい圧力」は「業風」を連想させ、「そこでやっと出口が見つかり、細い穴を通って広い空間に出るような」という「「死」の苦しみ」は出胎苦に当るようである。また、「たとえば難産だった人とか、産道の途中でつかえた人などの産婦人科医による記録と、LSD体験で語られることとが相当に一致するというのである。もしそうであれば、人間の記憶という点についても興味深い発見であると思うが」と河合博士は述べているが、ヒンズー教や仏教の文献では、既に見てきたように、胎児にある種の意識があると主張しているのである。

以上のようなグロフ博士のLSDによる実験の結果について、胎内における苦しみにせめられて胎児がどんなことを考えたかという点までは、河合博士の紹介では触れてはいないが、LSD体験者のなかには、「周産期のレベル」において、胎児として胎内で考えたことも想起し、語ることができる人もあるのではなかろうか。また、われわれの普通の意識のなかに、これらの胎内苦や出胎苦の記憶がないのは、ヒンズー教や仏教の「生苦」が述べているように、出胎苦などの苦しみによって、その記憶を喪失してしまうからであろうか。

さて、いろいろ問題はあるにしても、LSDによる「周産期のレベル」とヒンズー教や仏教の「生苦」が驚くほど一致しているように思われるのは、どういうことであろうか。

論文のなかで原博士も引いている『正法念処経』巻第七十の「生苦」を述べている個所は、鬱単越人について、修行者が観ずべき、いくつかのことをあげているのであるが、次のように述べている。

「復た次に、修行者は随順して外身を観じて、此の衆生を観るに、云何んが現に他の善業尽きて死苦に就くを見るや。云何が覚らざるや。初には苦を生ぜず、生を受くる時に於て、父母の精血は、尿道の中においてあり、識生じて胎を受け、業風の集まる所、和合して之れを動ごかし、七日に一たび変じて、阿浮陀と名づけ、……十月胎に住し

て、牢獄に在るが如く苦悩逼迫り、一切の身分は猶し山の圧するが如し。胎中従り出でて既に生まれたるの後、風日に触れられ、大苦悩を受く。……生死の中に於て生まれ、大苦を為し、生具を破壊して生死に流転し、無常・苦・空・生滅・無我なり。云何んが鬱単越人は而も覚知らざるや。(3)」

この個所で注意すべきことは、「修行者は随順して外身を観じて、此の衆生を観るに、云何んが……。」とあることである。これは巻第七十の初めの方を見ると、

「復た次に、修行者は随順して外身を観じて、鬱単越を観るに、復た何等の愛す可き山林有りや。彼は聞慧を以て、或いは天眼を以て鬱単越を見るに、一大山有りて名づけて心順と曰ひ……。(4)」

とあって、修行者が鬱単越を観ずるについて、既に禅定によって鬱単越を観じた人から聞いて得た聞慧か、自からの天眼によって見るとある。

これによって知られることは、LSD体験者が幻覚状態の中で、「生苦」を再体験するように、インドではヨーガなどの修行によって、「生苦」を再体験することができたのではないかということである。

この点について、グロフ博士は次のように述べている。

「古代や東洋の精神的な修行には、分娩前後の領域や超個の領域への接近を可能にするために特別に考察されたものが多い。(5)」

と。

さて、以上のような「生苦」に関連したこととして、"*Scientific American*"という科学雑誌の日本版『サイエンス』（一九八六年六月号）において、H・ラゲルクランツとT・A・スロトキンの「誕生時のストレスとカテコールアミン」という論文が発表されている。その最初の個所を、次に紹介しておこう。

「胎児が生まれてくるということは、考えてみると恐ろしく危険な試練のように思える。胎児は何時間も産道内で圧迫され続け、その間、頭部にかなりの圧力を受ける。さらに、陣痛のたびに胎盤や臍帯（さいたい）が圧迫されるので、胎児への酸素供給は不足してくる。

やがて胎児は、外界から閉ざされ、暖かくて光のない子宮内環境から、冷たくて明るい分娩（ぶんべん）室に生み出される。そこでは巨人のように大きく見える大人が、新生児の足をつかまえて逆さにし、お尻をバチバチとたたいたりする。

分娩中の酸素不足や頭の圧迫などが引き金となって、胎児はストレスホルモンであるアドレナリンやノルアドレナリンを驚くほど大量に血液中に分泌する。その量は、分娩中の産婦や心臓発作を起こしたひん死の大人のレベルをしのぐほどである。アドレナリンやノルアドレナリンは、カテコールアミンと総称される化学物質のなかでも代表的なもので、ほんらい人間が闘争をしたり、あるいは生命を脅かすような危機から脱出するために、体内に蓄えられている。したがって、この種のホルモンが血液中で高い値を示すということ

は、とりもなおさず生体が危機にひんしていることを物語っているのである。

ところが、正常な分娩時のストレスは、見かけとは違ってそれほど危険なものではないようである。最近二〇年間の研究成果を集約すると、胎児はもっと早い時期でもストレスに耐える力をもっていることがわかる。この能力は、何といってもカテコールアミンに負うところが大きい。カテコールアミンは酸素欠乏のような悪条件下でも生命を維持する役目を果たしている。

さらに重要なことは、胎児にとってはストレスホルモンをつくらせるような出来事を経験することが、実際に必要なのである。こうして最終的にホルモンがどっと放出され、胎児が子宮外で生活する準備がととのうのである。[6]」

以上のような最近の研究結果の報告によると、「生苦」は肉体的にも、大変重要なもののようである。

註

(1) 河合隼雄「意識について」(『世界』一九八五年十一月号所収、二六三―二七六頁)。
(2) 同右、二七三頁。
(3) 『大正蔵』十七巻、四一二頁、下段―四一三頁、上段。
(4) 同右、四一二頁、中段。
(5) スタニスラフ・グロフ「意識の研究と人類の生存」(河合隼雄・吉福伸逸共編『宇宙意識への接近』所収、一七一頁)。
(6) H・ラゲルクランツ・T・A・スロトキン、工藤尚文・岸本廉夫訳「誕生時のストレスとカテコールアミン」(『サイエンス』一九八六、六、"*Scientific American*" 日本版所収、二二頁)。

三

筆者は、少年の頃、「生苦」について、次のように聞いたことがある。

人間は、前生において自ら次の生には人間に生まれたいと願い、そのための努力をして、その結果人間に生まれてくるのであるが、生まれてくる時の産道通過の苦しみで自分が人間に生まれたくて生まれてきたことをすっかり忘れて生まれてくるのである、と。

少し冗談めかして語られたこともあって、これは、人間は自己の責任において人間に生まれてきているのに、すっかり忘れてしまって、頼みもしないのに親が勝手に自分を生んだと言っていることに対する、比喩を用いての教えだと、このことを聞いて以来自分なりに了解してきた。

また、「生苦」の原語である、サンスクリット語やパーリ語の jāti-duḥkha, jāti-dukkha の jāti が「生きていること」というよりは、「生まれてくること」であって、「生苦」という語は、したがって「生まれてくる苦しみ」の意であるということも、仏教を学び始めた頃教えられていた。

原博士の論文や対談の所説によって、以上のような考え方は、いくつかの典拠を持つものであることを改めて教えられたのである。

日本においても、この「生苦」ということが伝えられている一例として、原博士は論文の冠頭に『宝物集』の、

「第一に、生苦と云は、人、母のはらにやどりて三百日、或は二百六十日有て、はじめて業の風ふきいださるゝ時、いきたる牛の皮をはぎて、しけるおどろの中をとをすがごとしといえり。又、なごやのふすまをもつてうけとむるといへども、百千のつるぎを以てさきわるがごとし。此故に、赤子のはじめてなく声は、くかなと申侍る也。(1)」

という、出胎前後の苦しみを「生苦」とする一文を紹介している。

平康頼が「鬼界が島から帰洛（『平家物語』では治承三年（一一七九））後数年間の成立(2)」とせられている、この『宝物集』より古い「生苦」についての言及は、巻末に附せられた文に寛和元年（九八五）四月にその功を畢ったとある、源信の『往生要集』に見出される。

「二に苦とは、この身は、初めて生れし時より常に苦悩を受く。宝積経に説くが如し。もしは男、もしは女、たまたま生れて地に堕つるに、或は手を以て捧げ、或は衣をもて承け接るも、或は冬夏の時、冷熱の風触るれば大苦悩を受くること、牛を生剝ぎて、墻壁に触れしむるが如し。と。（取意）(3)」

この記述においては、せっかく『宝積経』をあげていながら、「生苦」と明示していないことや、産道通過の苦しみが述べられていないことなどによって、原博士は注では「如牛剝皮」ということで言及しているが、論文ではこの個所を紹介されなかったものと思われる。

ところで、この「生苦」の一文は、鎌倉時代以後、沢山作られた「講式」のなかにも見出される。鎌倉時代中期、高野山の最も一般的な形と見られている高野山の「二十五三昧式」を見てみると、

「二苦相者・此身従二初生時一常受二苦悩一如二宝積経一説一若男若女適堕レ地・或以レ手捧或以レ衣接・或冬夏時冷熱風触二其身一受二大苦一悩如二生剝牛触一於牆壁一長大之後亦多二苦悩一・(4)」

とある。これは六道のうちの人道に三相を明す、その第二の「苦相」の最初の文である。このような「講式」の流行によって、「生苦」が世間に知られるようになっていったものと思われる。

真宗においては、建武四年（一三三七）八月、存覚が染筆したという識語のある『顕名鈔』に胎内苦、産道通過のときの出胎苦、その出胎苦による前生の記憶の忘失が明確に述べられ、「生苦」が取りあげられている。

本稿の冠頭に出したが、もう一度紹介しておこう。

「生苦トイフハムマルヽトキノ苦ナリ。十月ノアヒダ三百余日胎内ニ処シテ五位ヲヘ、血肉ニマシハリテ諸苦ヲウク。月ミチ期イタリテノチ、ハシメテムマルヽトキ、頭ヲサカサマニシ、身ヲツヽメテイツ、一切ノ骨節ツヽマリテノフルコトアタハス、ソノ苦痛ニヨリテ前生ノ事コト〳〵クワスル。(5)」

これは、「四苦」を述べている、最初の「生苦」の説明である。いか

なる典拠によるかは明らかでないが、日本の「生苦」文献では、最も要点をおさえた記述になっているように思われる。

次に、この「生苦」は、説教のなかでも語りつがれてきたようであり、今でも戦前の説教を記憶している年輩の人のなかには、「生きたる牛の皮をはぎて……」という文句を思い出す人がある。そこで、試みに、『真宗史料集成』第五巻「談義本」や第十巻「法論と庶民教化」を見てみると、そこにやはり「生苦」が説かれているのである。

先ず浅井了意(一六二二―一六九一)の『勧信義談鈔』を紹介しよう。

「ソノ八苦トハ、ヒトツニハ生苦。イハユル母ノ胎ニヤドリ、月ミチ期イタリテスデニ生ゼントスルトキ、モシハ生絹、モシハ帛等ヲモツテコレヲウクルトイヘドモ、ソノ生ズルトキゾノ児ノ身ニフル、。タトヘバ刀剣モカズナラズ。生剝ノ牛ヲヲフテ棘ノナカニイル、ガゴトシ。(6)」

とある。また『四倒八苦』という談義本には、

「第一に生苦トイフハ、ムマル、クルシミヲアカスナリ。宝積経ニイハク、母ノハラニ三百日ノアヒダツ、マレテ、ハシメテムマレイツルトキハ、イキタルウシノ皮ヲハキテ、カキカヘニフレオトロカラタチノナカヲヤフランカコトシ。アルヒハ手ヲモテサ、ケ、ヤハラカナル衣ヲモテウケトルトイヘトモ、百千ノツルキヲモテキリサクカコトクナリ。カルカユヘニ、アカ子ノハシメテナクコエハ、苦カナ〳〵トナクトイヘリ。(7)」

とある。

真宗以外の例で、江戸後期のものと思われる版本の紹介(8)や、明治二十年(9)、明治二十九年(10)の写本が活字化されている聖衆来迎寺に伝わる「六道絵」の絵解き台本である『六道絵相略縁起』も、「生苦」についての説明をしている。それは「人道生老病死四苦之図」についての絵解きの文において、

「生苦は出産の処なり。人間胎内に宿るまでは、前世をよく知り、我れ今人間に生まれなば先きの世の事も、胎内の事も、能く人に語り聞かさんと思えども、生まるる時の苦しみに逼られて皆悉く忘るとなり。(11)」

とある。

以上の例によって知られるように「四苦」の一つ、「生苦」ということは、第二次世界大戦以前の伝承のなかでは、「ムマル、クルシミ」とあらわされていて、決して「生存の苦」、すなわち「生きている苦しみ」とは解釈されていなかったということである。

それが終戦後の、これまでの価値観の否定や崩壊のなかで、古いかたちの説教を伝承する人々が少くなり、仏教の思想についても、科学的、合理的に解釈することが行われるようになり、いつしか「生苦」の意味がわからなくなるとともに、「生きている苦しみ」というような解釈が常識的に語られるようになってしまったようである。

註

(1) 吉田幸一・小泉弘共編『宝物集』九冊本（古典文庫二五八）九七頁。
(2) 『日本古典文学大辞典』第五巻、四三九頁。
(3) 源信『往生要集』巻上（「日本思想大系」6、一九七〇年九月、岩波書店、三八頁）。
(4) 和多昭夫「高野山の二十五昧式」（仏教文学研究会編『仏教文学研究』㈣所収、三五八頁、下段）。
(5) 存覚『顕名鈔』（石田充之・千葉乗隆編『真宗史料集成』第一巻「親鸞と初期教団」所収、七五〇頁、下段）。
(6) 浅井了意『勧信義談鈔』（柏原祐泉編『真宗史料集成』第十巻「法論と庶民教化」所収、六〇一頁、上段）。
(7) 「四倒八苦」（千葉乗隆編『真宗史料集成』第五巻・「談義本」所収、一七一頁下段―一七二頁、上段）。
(8) 大串純夫「十界図考」（「美術研究」一一九号、昭和十六年十一月。『来迎芸術』（昭和五十八年三月、法蔵館、法蔵選書21）に再録）。
(9) 真保亨「資料紹介 六道絵相略縁起」（「日本仏教」三六号、昭和四十二年五月）。
(10) 林雅彦「六道絵相略縁起」（林雅彦・徳田和夫編『絵解き台本集』（伝承文学資料集第十一輯）所収）。
(11) 飛鳥井明実「聖衆来迎寺の歴史と信仰」（『古寺巡礼―近江―、聖衆来迎寺』所収、昭和五十五年五月、淡交社、一〇五頁）。

四

日本における「生苦」文献の主なる典拠の一つは、『往生要集』があげているように『宝積経』である。

この『宝積経』なるものは、単一の経典ではなく、漢訳『大宝積経』では、百二十巻、四十九経よりなり、経典によって訳出者も異なり、その大半が主題となる思想も違う独立経典の集成である。

『大宝積経』における「生苦」を説く経典は、このような経典群の中に見出されるもので、二つの経典が該当する。すなわち、一つは巻第五十五、菩提流志訳「仏為阿難説処胎会」[1]であり、もう一つは、この「仏為阿難説処胎会」を「入母胎経」と呼んで取り入れている巻第五十六・五十七、義浄訳「仏説入胎蔵会」[2]とである。

この義浄訳「仏説入胎蔵会」所収の「入母胎経」は、同じく「入母胎経」の名で義浄が『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻第十一・十二の中でも訳しているが[3]、旧訳にも竺法護訳『仏説胞胎経』[4]がある。

したがって、今は以上の経典を一括して入母胎経類と呼ぶこととして、その内容を見てみると、失訳『仏説五王経』[5]などのように、四苦八苦の一つとしての「生苦」を説明解釈しているのではなく、中有より母胎に入り、その胎中の相状を詳細に説き、そして「生苦」に至るのである。

これら入母胎経類の文の一部は『大毘婆沙論』巻第七十[6]や『倶舎論』巻第九・「分別世品」[7]の中に見出される文と大変よく似ている。恐らく、『大毘婆沙論』や『倶舎論』は入母胎経類より、要文を取り入れているのであろう。

『大毘婆沙論』や『倶舎論』では、それらの文を、いろいろな問題に分けて論じているのであるが、『倶舎論』と入母胎経類の文がいかに近いかを、一、二の対応個所によって示してみよう。

「是の如き中有は、生ずる所に至らんが為めに、先づ倒心を起して

欲境に馳趣す。〔謂はく〕彼は業力の起す所の眼根に由りて、遠方に住すと雖も能く生処の父母の交会するを見て、倒心を起すなり。若し男ならば母を縁じて男の欲を起し、若し女ならば父を縁じて女の欲を起し、此れに翻じ〔父母の〕二を縁じて倶に瞋心を起す。」

——玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』巻第九・「分別世品」[8]——

「又、彼の中有の胎に入らんと欲する時には、心即ち顛倒して、若し是れ男ならば、母に於て愛を生じ父に於て憎を生じ、若し是れ女ならば、父に於て愛を生じ母に於て憎を生じ、……。」

——義浄訳『大宝積経』巻第五十六・「仏説入胎蔵会」[9]——

『倶舎論』の方が少し詳しくなっているが、ほとんど同じ文である。なお、この個所はフロイトのいうエディプス・コンプレックス的な考えがあらわされていて、注目されるところである。

「若し男ならば、胎に処するや母の右脇に依り背に向ひて蹲坐し、若し女ならば、胎に処するや母の左脇に依り腹に向ひて住す。」

——玄奘訳『阿毘達磨倶舎論』巻第九・「分別世品」[10]——

「難陀、胎は若し是れ男ならば、母の右脇に在って蹲踞して坐し、両手にて面を掩うて母の背に向って住し、若し是れ女ならば、母の左脇に在って蹲踞して坐し、両手にて面を掩うて母の腹に向って住す。」

——義浄訳『大宝積経』巻第五十六・「仏説入胎蔵会」[11]——

以上のような記述を見てみると、翻訳による相違はあっても、ほとんど同じ文のように思われる。さて、この「仏説入胎蔵会」では、つづいて、次のような胎内苦が述べられている。

「生蔵の下、熱蔵の上に在って、生物は下鎮し、熟物は上刺して、五処を縛って尖標に挿み在くが如し。若し母多食し、或いは時に少食するも、皆苦悩を受く。是くの如くなれば、若し極厲を食し、或いは乾燥を食し、極冷・極熱・鹹・淡・苦・酷、或いは太だしき甘・辛と、此等を食する時、皆苦痛を受く。若し母欲を行い、或いは急ぎ行き走り、或いは時に危坐し、久しく坐し、久しく臥し、跳躑するの時、悉く皆苦を受く。難陀、当に知るべし、母胎の中に処って、是くの如き等の種種なる諸苦ありて、其の身を逼迫することは、具さに説くべからざることを。[12]」

そして、次に胎内での胎児の相状が詳細に説かれ、更に出胎苦が、以下のように述べられている。

「難陀、此の胎は、是くの如く母の腹中に住して、斯くの如き苦を受く。又た産まれんと欲する時、辛苦して出づるに、彼の業風に由って、手をして交り合はしめ、支節拳縮し、大劇苦を受け、母胎を出でんと欲するや、身躰青瘀なり。猶し初めて腫れて触著すべきこと難きが如く、飢退逼迫し、心熱悩に懸るなり。業の因縁に由りて、風に推し出されて、既に胎を出で已って、外風に触れらるるや、塗炭を割るが如し。手衣の触るる時も、皆極苦を受く。[13]」

とある。

ところで、『往生要集』において、源信は「生苦」について、『宝積経』をあげていながら以上のような胎内苦や出胎苦には触れないで、ただ出胎後の苦だけで紹介しているのは、何故であろうか。

既に取り上げた『往生要集』の「生苦」についての文を、もう一度出して『大宝積経』の文と対照してみよう。それは明らかに「仏為阿難説処胎会」と「仏説入胎蔵会」の「生苦」についての、しかも出胎後の苦を述べている個所によっているように見受けられる。

「二に苦とは、この身は、初めて生れし時より常に苦悩を受く。宝積経に説くが如し。もしは男、もしは女、たまたま生れて地に堕つるに、或は手を以て捧げ、或は衣をもて承け接るも、或は冬夏の時、冷熱の風触るれば大苦悩を受くること、牛を生剝ぎて、墻壁に触れしむるが如し。と。（取意）」(14)

『大宝積経』では、「仏為阿難説処胎会」の文の方が、源信の引いている文に表現が近いので、次にそれを取り出してみよう。

「初めて胎を出づる時、若しは男、若しは女、適たま生まれて地に堕つるに、或いは手を以て捧げ、或いは衣をもて承け接るも、或いは床席に在き、或いは屋中、或いは復た地上、或いは迥露の処に在き、或いは日中に在き、或いは冬夏の時、冷熱の風此の身に触るれば、初めて生まれて大苦悩を受くること、牛を生剝ぎて、牆壁に触れしむるが如し。」(15)

この文は、胎内苦、出胎苦を詳細に説いてきて、その後で出胎後の苦を述べている個所である。

胎内苦、出胎苦、出胎後の苦をすべて含めて「生苦」とするならば、出胎後の苦は、その一部分にすぎないのであるが、源信が何故この部分をもって「生苦」にあてたか、『宝積経』をあげているだけに疑問の残るところである。もっとも、源信は「苦」を明すのが目的であって、「生苦」と限定していないのではあるが。

これに対し、本稿の冠頭に置いた『顕名鈔』における存覚の「生苦」についての記述は、胎内苦、出胎苦、前生の記憶の忘却まであらわしているが、出胎後の苦については触れていない。

註

(1)　『大正蔵』十一巻、三二二頁、上段―三二六頁、中段。
(2)　『大正蔵』十一巻、三二六頁、中段―三三六頁、下段。
(3)　『大正蔵』二十四巻、二五三頁、上段―二六〇頁、中段。ただし、この二六〇頁、中段では「爾時世尊説是入胎経已……。」とあって、「入胎経」と言っている。
(4)　『大正蔵』十一巻、八八六頁、上段―八九〇頁、下段。
(5)　『大正蔵』十四巻、七九五頁、下段―七九七頁、上段。
(6)　『大正蔵』二十七巻、三六〇頁、下段―三六六頁、上段。
(7)　『大正蔵』二十九巻、四五頁、下段―五一頁、中段。
(8)　『大正蔵』二十九巻、四六頁、下段。梵文の対応個所は、P. Pradhan, ed., *Abhidharma-kośabhāṣya*, p. 126, *ll.* 17-21. そのチベット訳の和訳は、山口益・舟橋一哉『倶舎論の原典解明　世間品』一二七頁―一二八頁参照。

(9) 『大正蔵』十一巻、三二八頁、中段。
(10) 『大正蔵』二十九巻、四六頁、下段、P. Pradhan, ed., *Abhidharma-kośabhāṣya*, p. 126, *ll.* 24-25. そのチベット訳の和訳は、『倶舎論の原典解明　世間品』一二八頁参照。
(11) 『大正蔵』十一巻、三三〇頁、中段。
(12) 『大正蔵』十一巻、三三〇頁、中―下段。
(13) 『大正蔵』十一巻、三三三頁、上段。
(14) 源信『往生要集』巻上（「日本思想大系」6、三八頁）。
(15) 『大正蔵』十一巻、三三五頁、上段。

五

『大宝積経』・「仏為阿難説処胎会」と「仏説入胎蔵会」では、以上のような胎内苦、出胎苦、出胎後の苦などを含む「生苦」を説きつつ、次に取り上げるような文が散見する。

「難陀、当に知るべし、母胎の中に処って、是くの如き等の種種なる諸苦ありて、其の身を逼迫することは、具さに説くべからざることを。人趣の中に於てすら此くの如き苦を受く。何に況んや、悪趣・地獄の中の苦は比喩し難からん。是の故に、難陀、誰れか智ある者にして、生死無辺なる苦海に居て、斯の厄難を受くることを楽わんや。(1)」

また、

「難陀、第三十六の七日、其の子は母の腹中に住することを楽はず。(2)」

更に、また、

「仏、難陀に告ぐらく、誰れか生死に於て、母胎に入って、極めたる辛苦を受くることを楽はんと。(3)」

このような文において知られてくることは、生死無辺なる苦海に生まれてくることを繰り返すならば、このような「生苦」を何度も受けなければならないこと、そのことをよく知ったならば、「生苦」を受けるような、胎の中に生まれてくることを楽うべきでないということが教えられていることである。

「爾の時、世尊は、復た難陀に告ぐらく、汝今既に胎苦・生苦を知れば、応に凡べて胎生を受くる者は、是れ極めて苦悩することを識るべし、と。(4)」

ともある。

しかし、次のようにも説かれている。

「難陀、此の諸の有情、生まれて人中に在るや、是くの如き無量の苦悩ありと雖も、然れども是れ勝処なり。無量百千倶胝劫の中に於ても、人身は得難ければなり。……人趣は得難く、難処を遠離することは、更に復た是れ難きなり。(5)」

「生苦」を経てこの世に生まれ出て、無量の苦悩はあっても、人間界は勝れた処であり、人身は得難いと。人間なればこそ、このような苦を知り、苦を縁として、生死出離の法を聞き、行ずることができるというのである。

入母胎経類において、「生苦」が説かれるのは、まさに、この世に執着し、わが身に固執して生きている衆生に、生死出離の一道を求めよという仏陀の教誡と勧化なのである。

ここを、原博士は次のように述べている。

「人間は何回も生まれてきては輪廻するわけですが、そのたびごとに胎児はお腹のなかで、今度母胎より出て人と生まれたときは心を入れ替えて、二度とこのように胎内に入ってこないように努力しようとか、サーンキャ哲学やヴェーダーンタ哲学を勉強しようとか、梵我一如の境地に達しようとか、お腹のなかで考えているというのです。そして月みちて、いよいよ出産というわけですが、そのときにお腹のなかに風が吹いてきて、倒懸、すなわち頭を下にした逆さまの位置にさせられ、出胎の風が吹いて来て母体（母胎か―筆者）から外へ出されるというのです。ところが、産道が自分の体のサイズよりもたいへん小さいので、出胎時に狭い通路でいたく締めつけられる。苦しくてたまらない。その苦しさのあまり、お腹のなかで考えていたことを、全部きれいさっぱり忘れてしまうというわけです。

サンスクリット語でバーラという言葉がありますが、子供という意味とバカという意味がある。つまり、産道を通過した結果、バーラ、子供と同時にバカになってしまったというわけです。バーラの意味が、そういうことであったということを、私はそのとき知りました。お腹にいるときには、また「胎内苦」といって、汚く狭い場所に閉じこめられる「苦」を感じていますから、もう二度とこんなところに生まれるのはこりごりだと感じ、出胎のあかつきにはもう輪廻をくりかえさないように今度こそは努力しよう、したがって今回を最後として解脱しようと心に決めるわけです。その意味では胎内の胎児の決心はなかなか殊勝なものですが、それが産道通過の苦によってすっかり忘れられてしまうのですから、また元の木阿弥になって、再び、何度も何度も輪廻するのだというのです。胎内苦、出胎苦、要するに母胎に宿ってから誕生まで一連の苦があるわけですが、それをもっとも象徴的にいっているのが生苦で、実際、産道通過の痛みがあって、この激痛が無知をよびおこし、輪廻をもたらすことになるわけです。」(6)

原博士の、以上の説明は、ヒンズー教の文献にもとづいてなされているので、胎児は胎内苦にせめられて、今度出胎したら、心を入れ替えて、二度とこのように胎内に入ってこないように努力しようとか、サーンキャ哲学やヴェーダーンタ哲学を勉強しようとか、梵我一如の境地に達しようとか、お腹のなかで考えているという言い方になるのであるが、これは、当然、仏教の立場で表現すれば、今度人間として出胎したら、仏教の教えを聞き、修行して解脱しようとか、南無阿弥陀仏のいわれを聞信し、信心獲得して、浄土に生まれ仏陀となろう、そしてまだ生死の苦海に沈没している衆生たちを救う者となろうということになるであろう。

いずれにしても、胎内苦にせめられて、既に胎内において、人間は解脱することを自ら一度は決意するということ、それが出胎苦によってすっかり忘却して、無知者となってこの世に出てくるということ、この教示こそ、「生苦」ということをヒンズー教や仏教が取り上げている理由であると思われる。

さて、無知者となってこの世に出てくる人間に、以上のことを想起させる方法も、インドでは、いろいろ行われてきた。

原博士によると、それが苦行であったり、太陽の百八名を唱える行であったり、禅定であったり samskāra を現前せしめる行法であったりするのである。(7)

真宗においては、聞法が特にすすめられているが、それは、「生苦」という仏語が、以上のような意味を持っていることを聞くことによって、宿善あって、今、名号のいわれを聞いて、信心獲得して浄土に生まれることのできる人間になることこそ、人間に生まれた本当の目的であることを知ることに他ならないのである。

註

(1) 『大正蔵』十一巻、三三〇頁、下段。
(2) 同右。
(3) 同右、三三一頁、下段。
(4) 同右、三三一頁、上段。
(5) 同右、三三三頁、中段。
(6) 三枝充悳・原実（対談）「インド思想と仏教」（『仏教の思想』六―七頁）。
(7) 原実「生苦」六八三頁、注(56)。および "*tapas, dharma, puṇya* (=*sukṛta*)"（平川彰博士還暦記念論集『仏教における法の研究』所収、昭和五〇年十月、春秋社、五二四頁、五四二頁の注(56)）

おわりに

原実博士や河合隼雄博士の論文に導かれて、「生苦」をめぐる諸問題を取り上げてみたが、それは日常の意識や近代の合理主義的考えでは受け入れられないような内容を含んでいる。

したがって、既に述べたように、「生苦」を「生まれてくる苦しみ」とは了解できず、「生きている苦しみ」あるいは「生存の苦」という解釈も一部で行われている。

ところで、従来の近代合理主義にもとづく科学的思考に反省や批判の眼が近年に至って向けられるようになり、トランスパーソナル心理学、あるいはニューサイエンスが唱導せられるようになってきた。

そのリーダー格の一人が、スタニスラフ・グロフ博士であり、三〇数年にわたる研究の結果、人間の無意識領域を明らかにしつつあり、出産時における死ぬほどの苦しみの問題も人々に広く知られるに至った。

このような現況のなかで考えてみるに、本稿で取り上げた「生苦」はインドにおいては、ヨーガなどの行によって無意識あるいは超意識のな

かで再体験されるという事実にもとづいて説かれているのであって、それに宗教的意味づけをして教えているものと言うことができる。

いずれにしても、仏教についても常識や合理主義で解釈したり、あるいはいわゆる科学的、合理的思考に受け入れられない思想は排除または無視するというような傾向が認められるが、反省すべき時に至っているのではないかと思われる。

なお、インドの仏教では、「生苦」による記憶の忘失ということが、「臨終の正念」の問題と関連して説かれていること、最近の臨死体験の報告が「中有」の問題と関っているように思われることなど、死の教育や死の看とりという今日的課題をふまえて論ずべきであるが、それらについては、後日果したいと思う。